

(5)文楽かベーターヴェンか

『羊の歌』「ある晴れた日に」には、加藤は、この日新橋演舞場に文楽の引っ越し公演を見に行ったとある。やがて戦争によってかき消されるだろう日本文化に対する哀惜の念が加藤にはあったということによく知られた件である。しかし、何を見たかについてははっきりと書かれていない。わずかに「半七さん今頃は……」という科白が引用され『艶容女舞衣 酒屋の段』(はですがたおんなまいぎぬ さかやのだん)であったことが示唆され、名人古靱太夫(こうつぼだゆう)が語ったように記される。

ところが、当時の講演記録によれば、12月8日には『艶容女舞衣 酒屋の段』は上演されず、古靱太夫は戦時中「酒屋の段」を一度も語っていないと自ら述べる(『豊竹山城少掾聞書』和敬書店、1949年)。「酒屋の段」は他の義太夫によって、翌12月9日から上演された。つまり「12月8日」と「半七さん今頃は」と「古靱太夫」とが一つに結びつかないのである。しかも八冊にわたる『青春ノート』には、文楽についての記述はどこにも、ただの一行も綴られていない。

だからといって、加藤がその後『艶容女舞衣 酒屋の段』を一度も見えていないわけではない。のちのちに書いた「柱をめぐる旅」という文章で「人形浄瑠璃の舞台で、柱をめぐるの立廻りや「今頃は半七さん……」の科白が柱と切り離せないことも知った」(『太陽』平凡社、1988年8月号、「著作集19」収録)と書いたが、これは実際の舞台を見ないと書けない文章である。

一方、「ノートⅧ」には、「豊増昇（とよますのぼる）のベートーヴェンをききに行こうと思ったが、妹が心細いと云ふからやめた」とある。実妹本村久子（もとむらひさこ）の証言によれば、母の止めるのを振り切って出かけた。どこに出かけたのか。「さあ、音楽会だったかしら。そのへんは記憶がはっきりしません」とややあいまいに答えてくれた。しかし、加藤は豊増昇のベートーヴェン・ピアノソナタ演奏会に行ったのだと私は確信する（ふたつの公演は同じ時間帯の公演であり、ふたつとも見ることは不可能である）。

豊増は戦前から戦後初期にかけて活躍した名ピアニストで、指揮者小澤征爾（おざわせいじ）やピアニスト館野泉（たてのいずみ）の師匠である。1941年、豊増は29歳の若さで、ベートーヴェン・ピアノソナタの全曲演奏会（全7回）を続けていて、12月8日はその最終演奏会の日であった（精しくは拙著『加藤周一はいかにして「加藤周一」となったか』岩波書店、2018年、参照）。

12月8日に、ベートーヴェンを聴きに行った理由は何だろうか。加藤は戦争に勝ち目はないと判断していた。いずれ戦争が激しくなり、芸術を楽しむどころではなくなる。しかも自分は、戦争によって生命を落とす可能性があるとは認識していた。芸術に触れる最後の機会かもしれない、という予測さえあったろう。それが妹には心細いといわれ、母からは止められたにも関わらず、出かけていった理由に違いない。